

本草ニハ不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>五寸ト云フ、又一種河中ニ赤色ノギ<sup>ム</sup>アリ、俗名ミコウヲ嵯峨一名ハチブリ。筑前サシギ<sup>ム</sup>備前デンキ<sup>ム</sup>勢州カハオコゼ<sup>ム</sup>防州アカリコ<sup>ム</sup>丹波形狀ハギ<sup>ム</sup>ニ同ジ、刺アリテヨク人ヲ蟻<sup>ス</sup>、海中ニモ亦アリ、是時珍食物本草ノ鱈絲魚ナリ、

〔百家琦行傳〕田中丘隅右衛門

丘隅ゑもんは原東海道川崎宿の問屋場の人足なりしが其器量衆に秀たるをもて問屋役人となりしが竟に止事なき御方の御とり立にあひて大祿の武官となれりはじめ川崎宿にありし頃近郷に妻の母のありけるが丘隅ゑもん一時この丈母のかたへ時候の見まひに行んと思ひ何がな土産にもて行べしと近隣にて網をかりて川獵をなしけるに<sup>サザラ</sup>といへる魚一尾とり得たりさらば是を人事にすべしと頓て携へて丈母のもとへ急ぎけるが只有山裏にて狩人の網をはり置し其中に雉子一羽かゝりてばたばたと羽たきして在けり時節獵師もあたりに見ず丘隅ゑもん是を看著しうとめへの人事にせんには這鳥こそ好りけれとて忽ち彼雉子を奮ひとり持來し鱈を網の裏へうちこみおき、這處をはせ去けり其迹へかの網をかけおきたる獵師きたり件の鱈を見て大いにおどろき是いかに水中に住べき魚の山中の網にかゝりしは心得がたしと頓て同輩のものを呼來りて看せければいづれも驚き是凡事にあるべからずとて頓て陰陽師に卜しめはるに是ひとへに山神の祟なり快くこの魚を神に祭るべしと示しける程に無智の愚民どもこれに従ひ俄に村中錢を集めてたちまち一個の祠をたて華表瑞籬まで造立かの鱈を大明神と勧請しけり其后一日大いに風雨ありて乾坤震動したりける村民これを神變とこころ得次の日鱈大明神へ湯花をさげ神樂を奏しける巫祝賣主らこれに窺<sup>ツカミ</sup>海あふれて這ほとり一圓の泥海となり郷人おほく死べしと託宣なりと云けるにぞ村裏の愚